



2022～2023

津南ロータリークラブ週報

第2630地区 ROTARY CLUB OF TSU-SOUTH

例会日/毎火曜日
例会場/ホテル津センターパレス 津市大門7-15
事務所/津市大門7-15
津センターパレス3F
TEL 225-2373 FAX 213-6175

会長/西井 健之
幹事/庄司 正樹
E-mail: src.tsu@dream.ocn.ne.jp
ホームページ: http://tsu-minami-rc.com/



第2658回例会 2022年7月19日(火) 天候 雨



例会予定

- 7月26日(火) 中井茂平ガバナー補佐訪問
クラブ協議会 於:「オホーツク」
- 8月2日(火) 皆出席表彰・月間関連卓話
竹内敏明会員増強委員長
- 8月9日(火) 納涼夜間例会 18:30~
於:「オホーツク」
- 8月16日(火) 特別休会

進行担当

(伊藤(仁) SAA)

国歌斉唱 ロータリーソング 四つのテスト

出席報告

(堀田委員)

7月19日 出席率 41名中 29名 70.73%
7月5日 修正出席率 41名中 41名 100.0%

ニコBOX

(野地副委員長)

- 西井 健之君 本日は、奉仕計画発表の後半です。各委員会の皆様よろしくお願い致します。
- 庄司 正樹君 ・本日奉仕計画発表第2回です。宜しくお願いします。
・先日のファイヤーサイドミーティングおつかれさまでした。
- 伊藤 孝行君 梅雨は終わったか始まりか、災害に見舞われないで生活したい。
- 村木 正二君 大変な時代になって来ました。「四つのテスト」を忘れずに!
- 今野信太郎君 先日は、ファイアサイドご出席の皆様ありがとうございました。帰りは羽根会員にお世話になりました。
- 何川 高君 本日は、米山記念奨学会の奉仕計画を発表させていただきます。よろしくお願いします。

会長報告

(西井会長)

- ◆本日は奉仕計画発表後半です。各委員長の皆様宜しくお願い致します。
- ◆今日も世界遺産について話をさせていただきます。本日は、世界遺産を登録する為の前提条件についてです。前提条件は5つあります。
 - ①遺産を保有する国が世界遺産条約の締約国である事。
 - ②遺産を保有する締約国自身からの登録推薦である事。唯一の例外はエルサレムです。1967年の第三次中東戦争以降はイスラエルが実効支配をしていますが、国際社会はそれを認めておりません。紛争が続く情勢の為、隣国のヨルダンが世界遺産登録の申請を行い遺産保有国は実在しないエルサレムになるなど例外的な登録となっています。
 - ③遺産があらかじめ各国の暫定リストに記載されている事。締約国は、世界遺産登録を目指す国内の遺産を記載した「暫定リスト」を作成し、ユネスコの世界遺産センターに提出する事となっています。今、暫定リストに記載されている物件は、日本では「武家古都鎌倉」「彦根城」「飛鳥、藤原の宮都とその関連資産群」「平泉一仏国土を表す・建築・庭園及び考古学的遺産群」があります。又、今現在、世界遺産に登録申請中のものは、「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」がありますが、来年世界遺産委員会ですでにどうするか決定されます。
 - ④遺産が不動産である事。
 - ⑤遺産が保有国の法律などで保護されている事。

幹事報告

(庄司幹事)

- ★本日、奉仕計画書発表2の件
- ★本日、例会終了後、定例理事会開催の件
- ★7月26日(火)「オホーツク」短縮例会開催の件
- ★7月26日(火) 例会終了後、クラブ協議会開催の件

薄井 美弥君 こんにちは。天気が不順でなんだかスッキリしないですが、岩井様にならって頑張っていきます。

岩井 純朗君 今日も元気に頑張ります。

奉仕計画発表 2

ロータリー財団	吉村 哲夫
職業奉仕	奥田 邦雄
社会奉仕	山本 哲司
国際奉仕	村木 正二
青少年奉仕	岩井 純朗
親睦	林 裕行
会員選考	栗田 明
雑誌・広報	鈴木 康義
米山記念奨学会	何川 高

7月定例理事会報告

- 三重県緑化推進協会年会費の件 承認
社会奉仕費より¥10,000支出
- 「ダメ。ゼッタイ。」国連支援募金運動の件 承認
青少年奉仕費より¥4,000支出
- 皆出席表彰の件 承認
昨年度は、コロナウィルス感染対策で例会数減少だった為、通常の半額で贈呈、7月～6月末在籍の全会員を対象とする（新会員及び休会会員除く）
- 新会員2名の件 承認
三重いすゞ自動車(株)・(株)ドコモCS東海
- 事務局員夏休み休暇の件 承認
8月12日(金) 15日(月) 16日(火)
- 8月からの例会の件 承認
新型コロナウイルス感染対策

〈世界の世界遺産 No.1〉

マチュ・ピチュの歴史保護区



ワイナ・ピチュを背後に頂く標高2430mの尾根上に広がる空中都市マチュ・ピチュ。天体観測に用いられたと考えられる遺構が点在しています。

幻の空中都市はなぜ造られたのか？

インカ帝国の遺跡マチュ・ピチュは、アンデス山中の標高2430mの高地に築かれていることから「空中都市」とも呼ばれています。発見当初は、インカ帝国の最後の皇帝アタワルパの弟が、スペイン人の侵略から逃れて建てた伝説の都だと考えられました。付近の洞窟で発見された人骨のほとんどが女性だったため、巫女として仕えていたのでは、あるいは生贄とされたのではとも推測もされました。ところが21世紀に改めて調査したところ、3対2の割合で男性が多いと判明したのです。人口も750人程度で、都市というほどではないことも明らかになりました。「インカ帝国の隠し砦だった」「宗教施設だった」など、さまざまな説が挙げられましたが、現在では天体観測施設だったという説が有力です。

夏至の日と冬至の日に窓から朝日が射し込む塔、4つの角が正確に東西南北に向いている日時計のような石柱、水を張って月や星を映したと思われる2つの石の筒など、遺跡内には天体の動きに関わる遺構が多いのです。とはいえ、天体観測施設だったとしても、なぜこのような山中に、人目を避けるように築かれたのかは不明のままです。

もっと知りたい! インカ帝国には「太陽の処女」と呼ばれる女性たちがいて、共同生活を送っていました。男子禁制ですが皇帝だけは例外で、側室となる者もいました。華麗なハレムが大典を連想しますが、実際は織物をしたリバンや酒を作ったりと、与えられた労働に明け暮れる者がほとんどで、皇帝や聖職者が使う物品の製造担当という立場だったようです。